

とろんの(太一や)通信

— 承の章 —

とろん

僅か百年前後のヒトの生涯の中、モノでもヒトでもなんであれ、あ！っと遭遇し、う！！っと一瞬間で感染し、ん！！！っと決定づけられてしまう劇的瞬間遭遇風景が、突如と仕組まれたように起きてくるのは、『物語』を産み出す生き物、ヒト、が(うちゅう)に登場したときからの定め???

今から15年前、タイ北部界隈で愛妻はるか、あ！っと遭遇し、う！！っと一瞬間で感染し、ん！！！っと結ばれてしまった。

今から5年前、岡山県総社の山中で今の(太一や)風景に、あ！っと遭遇し、う！！っと一瞬間で感染し、ん！！！っと(新天地)が決まってしまった。

今から2年前、(太一や)11000坪の山中で、世にも美しい源流の奥の沢に、あ！っと遭遇し、う！！っと一瞬間で感染し、ん！！！っと(月の村)風景が浮上してしまっ

七週間の祭り(たましいのかくじっけん)第一弾は、2007年7月7日の七夕から続行されたのだけど、祭り直前、日本からやってきた友人は、祭り会場の(ムーンビレッジ)風景を観て、あ！！！っと驚き「とろんさん、祭りの準備がなにも始まってないじゃないですか！！！」と絶句し、大慌てで、日本から持ってきた道具を取り出し、あちこちのデコレーションを始めた。当のボクは、この友人の言葉に酷く驚き、「このなにもないキャ

ンバスから祭りが起き、始まるんだよ」と笑い返したものだ。

ボクは、この祭りに向けて、5年もの歳月をかけて祭りの準備、(村風景)を産み出し続けていたのだ。草ぼうぼうの原野を切り開き、井戸を掘り、共同台所を作り、そこに石釜やかまどが生まれ、村人の家々が建ち、田園風景を作りだし、休み泊まれる長屋や小屋、大きな六角堂や共同トイレも完成し、5年の間、祭り(本番)に向けて日常的に刻々と風景が生まれ展開してきたのだ。

そして今向かっている22日間の祭り(たましいのかくじっけん)第四弾は、2022年2月22日から始まるので、あと2年と少し。新天地の

全てを譲り渡されてからのこの2年間、昔の古い登記地図を頼りに、消えてしまった昔の山道を切り開きながら、11000坪の新天地の隅から隅まで確かめながら山奥に入ってゆく中、美しくって美味しい源流の奥の沢と遭遇したのだ。そして、一面の矢竹や藪を切り払ってゆく中、古文書に載っている古井戸や神社の跡なども出現してきて、今、∞、無限大文字に歩き巡る(月の村巡礼トレッキング)が、実現しているのだ。

(月の村)予定地は今なお、矢竹とイバラが群生し、日日、日常的に切り開き進んでいる状態で、(本番)までの2年間、黙々と切り開き続ける中、(モノでもヒトでもなんであれ、あ！っと遭遇し、う！！っと一瞬間で感染し、ん！！！っと決定づけられてしまう劇的瞬間遭遇風景)が、数々の『物語』が、きつと(仕組まれたように起きてくる)、そんな予感でいっぱい、だ。

美味しい源流の沢水、森の処女大気、そして起こした火は常にあり、いま、(大地の再生)の人たちと共に創った建物第一号が、(風のトイレ)。(月の村)に在る竹と木と矢竹を使って作った縄文風トイレ、だ。竹炭と森の有機物を敷いて、沢の水でおしりを洗い流し、量は増えないで分解されてゆき、臭いも無いフシギなトイレだ。

(本番)までの「アナタ」の登場で、建物第二号、第三号、と連鎖してゆき、真冬の(本番)22日間は、火は常に起きて在って、(月

の村)に在るものだけを使つての村風景が、(劇的瞬間遭遇風景)が産まれてゆく。だから、祭りは「もう始まっている！！！」のだ。日常生活の延長線上に、突如と祭り(本番)が立ち現れ、祭りのあとも、祭り会場がそのまま残され、日常生活へと有機的に連鎖してゆくのだから。

(たまたま必然)、2022年2月22日から22日間の祭りの最終日が3月15日でなかったら、このボクの妄想的意欲にスイッチが入ることはなかったろう。この3月15日は、46年前にボクに(とろん)という美しい響きの名をつけてくれた一等最初のパートナーの30回忌。

そしてその一週間後の3月21日の(太一や)七周年記念日は、旧友の縄文アーティスト(春のうらら)の12回忌。このボクを産んで3年後に、あ！っと自ら逝ってしまったボクの産みの母を筆頭に、この同じ時代にこの世に誕生し、ボクにイノチを吹きこんでさっさとあの世に逝ってしまった愛しの人たちへの弔いの祭り、となるといいな。

ヒト科がこの(うちゅう)に誕生し、イノチガケでボクらに残していった(イノチのたからもの)の、その最先端に活着している今のボクらのイノチが、今、花咲き開き放つ時、う！！っと、なにか、(うちゅう)とまぐあえる予感でいっぱい！！！！だ。

ともかくも、今、見捨てられたかつての聖地の山々を黙々と切り開いてゆく日常生活が続行してゆく中、(本番)がどんな風景でやってくるのか全く予測はできないけれども、過去のイノチたちへの弔いと、封印された聖地を開き放つという(神事)、祭りごと、は今のボクに託された「天の職」だと覚悟しているの、たったボク独りになつても、このタイミングで祭りは起き、始まるのだから。

山麓には「砂川公園キャンプ場」が在り、近くには日本三大稲荷の一つ「最上稲荷」の(薬湯)や「吉備路温泉」も在って、聖地「鬼の城」の山々を歩き廻りながら、祭りで起きたイノチ命いのちの渦をボクやアナタの(日常生活)へと連鎖してゆく道が立ち現われてくることだろう。

この祭りのふくらみの頂点で、ん！！！っとボクらの棲家が(月の村)に誕生してゆく弾みとなれば、サイコウ！！！！！！！！！！

「人生は自分の想い通りにしかならないなあ」と全細胞で想い感じる今日この頃。

あとちょっとで、69歳に成る、とろんより